

Changing processes of Tibetan village society in Qinghai - Case studies of the Churuma and Shunponshi villages

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/42243

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



学 位 論 文 要 旨

Dissertation Abstract

学位請求論文題名 Dissertation Title

中国青海省チベット族村社会の変遷過程
—チュルマ(曲馬爾)村とシュンボンシ(双朋西)村の事例から—

(和訳または英訳) Japanese or English Translation

Changing processes of Tibetan village society in Qinghai
Case studies of the churama and Shunponshi villages

人間社会環境学 専攻 (Division)

氏 名 (Name) 原 毅 太 [ガガシイ]

主任指導教員氏名 (Primary Supervisor) 鏡 味 治 也

(注) 学位論文要旨の表紙

Note: This is the cover page of the dissertation abstract.

Changing processes of Tibetan village society in Qinghai
- Case studies of the Churuma and Shunponshi villages -

Abstract

Through the inquiring survey, this paper investigates how liberal and democratic reforms of the People's Republic of China, its cultural revolution, economic reforms, and policies on production responsibility system, has transformed Tibetan village society residing in Qinghai province of China, changed its agricultural and stock production, education, population, family structure, marriage range and other. The purpose of this paper is to present political and economical changing of Tibetan village society, since the liberation in 1949.

Since the liberation of the Tibetan area in Qinghai province by Chinese People's Liberation Army in 1949, Tibetan traditional culture, economy and society, began to change rapidly, due to the political movements and economical policies implemented by the central government.

In 1958, feudal system of traditional Tibetan society system, such as tribal power, political system, religion and culture was abolished due to the democratic reforms implemented by the central government. Due to the policies of the people's communes that have been conducted in China nationwide, Tibetan villagers decided to work together as employees of the people's communes and dine together in the dining room.

By Cultural Revolution movements started in China from 1966 to 1976, traditional Tibetan culture and religion, was furious destructed.

In 1979, central government implemented contracting policies by providing livestock and arable land for each family in Tibet village society, thus increasing agricultural and livestock production.

In other words, since the liberation, traditional Tibetan village society, customs, and values began to transform due to the political and economic changes of the central government. Today, under the influence of the government, Tibetan society is still on the process of modernization.

学位論文要旨

1 本論の目的

本論は中国青海省在住のチベット族を研究対象とし、調査地域の村社会での聞き取りによって、中華人民共和国の解放や民主改革・人民公社、文化大革命、改革開放、生産責任制などの政策が、村社会の組織、農牧業の生産体系、教育、人口、家族構成、婚姻範囲などにどのような変化を与えたかを記録し、1949年解放から今日までのチベット族村社会の政治経済社会変化を軸にした全体的な民族誌を提示することを目的としている。

2 調査方法

本研究のもとになる現地調査は、五回に分けて行った。第一回目は2011年1月21日から4月5日までほぼ2か月半を掛けて、中国青海省黄南藏族自治州同仁県シュンボンシ（双朋西）郷チュルマ村やシュンボンシ村の生業、人口、家族構成などを調査し、調査村の全体的な状況を把握した。本論で取り上げたチュルマ村やシュンボンシ村の各家族の人口、家畜数、畑の畝数などは筆者が当時、一軒一軒を訪ねて収集した資料である。

第二回目は、2011年8月14日から9月14日まで一か月間を掛けて、青海省のチャラン寺やチベット自治区のパオンカ寺、デイクン寺、セラ寺などの鳥葬を調査した。

第三回目は、2012年7月15日から10月30日までほぼ3か月半を掛け、調査村の年長者を対象に、解放前後や民主改革、人民公社、文化大革命、生産請負制などの政治変革による村社会の変遷、及び村社会の出来事などを聞き取りした。また政府機関を通して調査村が行政的に属する同仁県や黄南藏族自治州の歴史の文献を収集した。

第四回目は、2013年1月25日から3月21日までほぼ2か月間を掛け、調査村の年長者を対象に、旧社会の長老会など自治組織について詳細な聞き取りをした。人民公社化や文化大革命、生産請負制などを実施する時、村の生産隊長や出納係などを務めた村人に、当時の生産状態、村社会の組織変遷などの聞き取りを行った。本論で取り上げているチュルマ村の各年代の農業収穫や家畜数、現金収入に関する表などは、当時チュルマ生産隊の出納係を務めた村人のFが保存している当時の資料から引用したものである。

第五回目は、2013年7月11日から8月11日まで一か月間を掛け、調査村の氏族や親族の関係を主として、90年代から青海省チベット地域に対して実施した計画生育政策における調査村の人口の変遷や家族構成の変遷などを調査した。

3 本論の構成と内容

第1章では、中国におけるチベット族の人口、分布、歴史などの概要を紹介している。調査地域である青海省や同仁県などの地理的な位置、人口、歴史などを紹介し、調査対象村の世帯数、家畜数、耕地の面積などを表で示した。

第2章では、近代チベット歴史の分水嶺である中華人民共和国によるチベットへの人民解放軍の進出「解放」（青海省は1949年解放され、チベット自治区は1951年解放された）、そして解放後の民主改革・人民公社化、文化大革命、生産責任制など政策を概観する。また、民主改革、文化大革命など政策や政治運動によって、チベット村社会の政治組織などがどのような変化を経験したかを記述するとともに、一度途絶えた村の自治組織が、改革開放政策とともに復活する背景を探ることで、チベット族社会の特質を考察する。

第3章では、旧社会と民主改革・人民公社、生産請負制などによる農牧業、出稼ぎの変遷、及び村人の家畜や耕地の所有形態の変遷過程を考察する。

第4章では、村の人口動態と父系集団であるツォワの役割とその変遷を記述する。

第5章では、調査村の村社会における寺院の教育制度、僧侶の生活、宗教儀礼及び村の宗教組織や年間宗教儀礼などを記述することにより、寺院が村社会に於いてどんな役割を果たしているかを記述する。

第6章では、チベットの葬送形式とその歴史を概観したうえで、調査村で行われてきた土葬、火葬、鳥葬などの過程と意味、そしてそれを行う村人の動機などを検討する。チベットの代表的な鳥葬場における鳥葬を記述し、若干の考察を試みる。

第7章では、論文全体のまとめを紹介する。

このうち特に第2～4章で、中華人民共和国成立以後の青海省チベット族社会の政治経済社会変化の記述分析が本論の主要な内容である。調査村を含む地域が青海省として中華人民共和国の一部になってから、中央政府の政治運動や経済政策によって、チベット族の旧来の文化や社会、経済などは急速に変容し始めた。

変貌の第一波は、1958年～59年のいわゆる地域叛乱以後、中国政府が実施した民主改革政策である。これによって伝統的なチベット社会の部族政権、或いは千戸・土司などの封建的な地域自治制度は廃止され、中国共産党（以下中共と略記する）の直接統治となり、宗教、習慣、文化なども封建的な事物として徹底的な批判を受け、あるものは破壊された。

第二波は1958年からの人民公社政策による、生産の集団化である。青海省は少数民族地域も内地（平原・漢民族地域）同様に人民公社化され、村人は生産隊の社員となり共同労働をし、分配を受けた。一時は家庭での炊事は禁止され共同食堂で一緒に食事することもあったが、しだいに食糧不足になり、中国全土に大規模な飢餓が発生した。

第三波は、1966年毛沢東中国共産党主席によって発動された文化大革命運動

である。主には「廃旧立新」の方針によって、チベット人地域も漢民族地域同様、伝統文化や宗教の破壊を受けた。文化大革命は 1976 年毛沢東夫人らの逮捕によって終息した。

第四波は、1979 年鄧小平の改革開放政策である。社会主義市場経済の導入によって中国経済は発展の転機を迎えた。以来 30 余年の間に中国経済は急速な発展を遂げた。チベット族村社会でも家畜や耕地を各家族に請負わせる「家庭聯産承包責任制」を実施し、事実上の自営農民が生まれ、農牧業の生産は順調に発展し、村人の生活が豊かになり始めた。とくに、2000 年から中央政府が西部大開発政策を実施した。これは幹線道路・発電施設など基礎的施設及び青蔵鉄道などの建設によってチベット人地域の経済を変動させたのである。

学位論文審査報告書

平成27年 2月 3日

1 論文提出者

金沢大学大学院人間社会環境研究科

専攻 人間社会環境学

氏名 ガザンジェ

2 学位論文題目（外国語の場合は、和訳を付記すること。）

中国青海省チベット族村社会の変遷過程

ーチュルマ(曲馬爾)村とシュンボンシ(双朋西)村の事例からー

3 審査結果

判定（いずれかに○印） ☒合格 ・ ☐不合格

授与学位（いずれかに○印） 博士（☒社会環境学・文学・法学・経済学・学術）

4 学位論文審査委員

委員長 鏡味治也 ㊟

委員 西本陽一

委員 森 雅秀

委員 溝部明男

委員 弁納才一

委員

（学位論文審査委員全員の審査により判定した。）

5 論文審査の結果の要旨

本論文はこれまで政治的事情から村レベルの民族誌的調査がほとんど行われてこなかった中国のチベット族の農牧民の生活文化の変遷について、青海省の牧畜を主生業とするふたつの村を調査地として、その長老を始めとする村びとへの丹念な聞き取りと、村政府に保管されている文書記録の収集から明らかにしようとしたものである。

序章で問題設定と調査地域・調査村の概要を紹介した後、第2章で20世紀に入ってから数々の政治変革にともなう調査地域の社会構造の変化を描き出し、本論文の骨格をつくりあげている。調査地域では元朝以来続いた世襲の部族長と民主的に選ばれた長老会による統治体制から、辛亥革命の影響により軍閥政権が台頭し、それと結んだ牧畜主が経済力を蓄えるようになる。1949年中華人民解放軍による解放後もしばらくは、部族長や牧畜主を役人に登用するなど旧来の社会構造が存続するが、1958年中共政府が調査地域で高級合作社を設置して牧畜や耕地を強制的に集団化したのに対してチベット族の反乱が起き、反乱平定後「民主改革」が実施されて、部族長や牧畜主は逮捕され、家畜や耕地は人民公社の集団財産とされた。村びとは階級区分されて貧農や中下農が権力を握るようになり、それまで牧畜に携わったことのない者までが家畜の世話に加わったため家畜数は減少した。また伝統的自治組織であった長老会も消滅し、共産党と生産大隊が統治の基盤になった。1962年調整政策で牧畜主は釈放されて牧畜に携わるようになり、家畜数は回復した。しかし1966年から始まる文化大革命で牧畜主はふたたび批判対象となり、階級闘争で村の生産性は停滞した。文化大革命が終わり、1983年に生産請負制が導入されるに及んで、家族を単位とする生産の仕組みが復活した。また人民公社も郷政府にかわって、行政村には郷政府の政策を伝える党支部書記と村長が置かれるだけになり、紛争を調停する役割を果たせなくなったので、長老会が復活した。こうした経緯を調査村の村びとへの聞き取りから詳細かつ具体的に描き出している。

第3章は調査地域の生業の変化をとりあげ、前章で指摘した政治変革の節目を境に、村びとの生業や生産の仕組みがどう変化したか論じている。調査村の生業の中心である牧畜は、1958年以前の、多数の家畜を所有する牧畜主とそれに雇われる貧しい放牧者、そして多くを占める中規模の自立的な農牧民という構成から、人民公社時代の財産共有を経て、1983年生産請負制導入以後の、家族を単位とした牧畜経営へと変遷した。この間、村全体の家畜総数は、主要家畜であるヤクの頭数ではさほど変化が見られないいっぽう、改革開放政策以後の中国全体の

経済発展に伴うように肉の消費が伸びている羊の頭数が 1983 年以降急増している。その過程で、かつての牧畜主や富農が復活した例もあれば、家族人数の減少などにより没落した者もある。またかつての貧農で、生産請負制以後に家畜を増やして大牧畜主になった者もあり、その盛衰を数世帯の個別例を挙げて詳述している。また調査地域では高値で売買される冬虫夏草の採取が格好の副収入減となっており、その出稼ぎで家計を支える世帯が多いことも紹介されている。

第 4 章は人口動態と家族・親族関係の変化を扱う。村レベルの人口動態については、記録の残る 1958 年以降生産請負制が始まる 1983 年までは微増の状態であったのが、以後急増に転じ、しかし 2004 年以後は微増に戻っているというデータが紹介されている。2000 年代に入ってから出生率低下には政府の計画出産政策の普及が影響し、子どもの少ない世帯が増えている。また父系親族集団のツォワは、山神を祭る儀式や冠婚葬祭の主催だけでなく、草原をめぐる紛争などでも団結の基盤であったが、1958 年から 1983 年のあいだはそうした活動は禁止あるいは抑制された。1983 年以後はふたたび認められるようになったものの、市場経済の浸透や生活の近代化で集団意識が薄れつつあるとしている。

第 5 章は村と近在のチベット仏教寺院との関係や村および寺院で行われる宗教行事を扱う。村から離れて建つ寺院は、次三男を僧侶として受け入れて教育を施したり、老人を近くに召喚させて世話をしたり、また村びとの出稼ぎに貸付金を提供したりと、宗教以外にも村びとの生活に大きく関わっている。また村にも世俗僧ともいえるべき僧侶が住んでおり、村の中で定期的に儀礼を行っていることを、具体例をあげて紹介している。

第 6 章は葬送儀礼をとりあげ、とくにチベット文化の特色である鳥葬について、調査村の事例に留まらずチベットの他地域の代表的な鳥葬場にも足を運んで得た資料を提示しながら、現在なお各所で行われている鳥葬の模様や手順を具体的に紹介している。

以上、これまで調査報告例が非常に限られていた中国在住チベット族の村レベルの生活様態を、実地調査に基づく一次資料から丹念かつ詳細に描き出した民族誌的価値は計り知れない。他方で、歴史的変化の記述に重点を置くあまり、資料の分析や他地域との比較が十分でない点が惜しまれる。また宗教を扱った第 5・6 章は民族誌的現在を基本にした記述で、歴史変化の記述が少なく、4 章までの章とのつながりが希薄である。しかし調査地の生活変化を村レベルで詳細に描き出した記述が今後の当該地域・民族の社会文化研究に持つ大きな価値は疑いなく、博士学位論文に十分に値すると審査員一同判断した。